
麒麟

むく。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麒麟

【コード】

N1327L

【作者名】

むく。

【あらすじ】

私は、ある公園で出逢った青年をひそかにきりんと呼んでいた。
ひとりの少女の初恋の物語。

彼は、随分前の夏も長袖を着ていた。私が、まだ小学生の頃。

私は学校が嫌いだった。登校なんてほとんどしなかったし、親はそれでも文句など言わなかった。

何が、というわけではなく、学校が嫌いだった。

登校するたびに見るクラスメイトの顔、あの恐ろしげな表情を見るのはひどく苦痛だった。

劣等生を見る担任の目、背負ったランドセル以上にかかる負荷と、定時に鳴るチャイム。

黒々と数字が書かれた丸型の時計も、廊下に響く足音も、広いだれの校庭も、私には色褪せて見えた。

そして、学校の次くらいに私は自宅が嫌いだった。

家が、ではなく、単に母がいたから嫌いだった。

母は、私を認知していないように思えた。こちらをあまり見なかった。

居心地の悪さから、毎日習慣のように家を出た。それが精一杯の解決策だった。

私は、表向きは小学生だった。

教科書の入ったランドセルを背負っていたし、上履きの入った手提げも左手に持っていた。だけど私は学校に行かなかった。

比較的遠い学校とは別方向の、病院の隣にある公園が私の居場所だった。

ベンチが3つあるだけの人気のない公園で、

私はある日、彼に出逢った。

彼は一番手前のベンチに座っていた。私の定位置。私はじっと彼を見た。

青白い顔をした青年で、細くて背が高そう、無口そうな面持ちをしていた。

彼は、私を見るとわずかに笑って、手招きをした。

「どうしたの、小学生」

目の前まで行くと彼はそう訊いた。

「学校は？」

私は首を振った。緊張で口は動かさず、履いているスカートをぎゅっと握った。

「座る？」

彼はベンチの右側を軽く叩きながら言った。

彼は私の目から見て、美少年だった。

栗色の髪が日に透けてきらきら光るようで、目が離せなくなることもしばしばあった。

「暑いね」

彼は私を見ずに言った。目線の先を追ってみたが、どうにもわからなかった。

長袖の黒いカーディガンの下に白いシャツ。

見るからに暑い格好でも、彼は汗ひとつかいてないようで、私は少し考えた後に言った。

「長袖だから、だよ」

彼は少し驚いたようにこちらを見て、目を細めてそつだね、と言った。

その日以来、彼は毎日公園に現れた。

私は以前よりも公園に入り浸った。休日も、朝から家を出て走って向かった。

彼は同じ服のときもあれば、すこし違った服を着ているときもあった。

けれど、基本は白と黒で構成された服で、そんな彼がかっこいいと思った。

秋も深まってきた頃、私はふと彼の首が普通より長いと思った。

率直に意見を言うと、彼はくつくつと笑った。そして、

「そつだよ、俺、きりんだから」

とおかしそうに言った。

それが予想以上に頭に残り、私はひそかに彼をきりんと呼ぶようになった。

そして私は春に中学生になった。

義務教育のおかげで、大嫌いな小学校を卒業した。

きりにそれを言うと、それはおめでとつ、と笑いながら言われた。

「じゃあもうここには来ないんだ」

私は少し迷って首を縦に振った。

「来るよ」

なんだかふいに涙が出そうになり、私は言葉を詰まらせる。

「学校は？」

「それも、行く」

「忙しいね」

きりんは、いつもみたいに笑った。

小学生のときとは違って、私には友達が数人できた。

垢抜けた子ではなかったけれど、ひどく居心地が良くなった。

そのせいで、私はあの公園に行かなくなった。

特に寂しくもなかったし、女友達は楽しかった。

けれどある日から、クラスにイジメが蔓延し始めた。

最初は、クラスで一番根暗な女子。次は、足が遅い男子。

変わっていく被害者の中で、ついに恐れていたことが起きた。

私の友達、数少ない友達の中の、1人が被害者になったのだ。

毎日の生活が狂っていった。私は休み時間にその子に近づくことができなかつた。だいたいじょうぶ、と声をかけることができなかつた。

イジメはエスカレートしていった。クラスの中でひとり、孤立する女の子。

私のかつての友達だった、女の子。

泣きそうな目でこちらを見るその子を、私は見ることができなかつた。

後ろめたさと罪悪感と恐怖がぐるぐる回る。

帰りのホームルームが終わった瞬間、私は走って学校を出た。

足が向かうのはきりんのいる公園だった。

久しぶりに来たそれは秋で、何一つ変わらない姿で私を迎えてくれたが、一番手前のベンチは空席だった。

きりんがいない。

急に激しい喪失感に襲われた。

見捨てた女の子を思い出して、思わずその場に立ち尽くした。

「お、中学生」

ふいに後ろから声がかかった。聞き覚えのある声で。涼しげな、低い声で。

勢い良く振り向くと、白いシャツに黒いカーディガンを羽織った、背の高い青年がいた。きりんだ。

私はぼろぼろと泣き出した。安心と、よみがえってくる罪悪感。

きりんは戸惑ったように私の頭に手を乗せ、どうしたのと訊いた。

彼が私に触れたのは、その日が初めてだった。細い指が、髪を撫でる。

私は5分くらいして泣き止んで、きりんと2人でベンチに座った。きりんは少し髪が短くなったようだったが、気のせいのようにも思えた。

「中学校、大変？」

私はこくりと頷いた。きりんはそっか、と相槌を打った。

「ひさしぶりだね」

私はもう一度首を縦に振った。ほんとうに私達は久しぶりだった。

「きりんは、ずっとここにいたの？」

きりんは一度「きりん？」と訊き返してああ、と頷き、少し笑った。

「うん、ずっといたよ」

私はその答えがひどく愛おしくてたまらなかった。

私はまた、学校に行かなくなり、代わりにその公園に入り浸った。たびたび学校から家に連絡が来たが、私は行かないと答え続けた。

秋も過ぎて、冬になった。きりんは灰色のマフラーをしていた。私は毎日セーラー服を着ていた。モノトーンのそれが、きりんとお揃いな気がして嬉しかった。

「学校には行ってないの？」

ある日私はきりにそう訊いた。きりんは、少しだけ間を置いた。

「前は行ってたよ」

「今は？」

きりんは首を横に振った。

「高校はやめたんだよ」

「いつ？」

んー、ときりんは悩んだ素振りをした。

「去年の夏」

「どうして？」

「さあ、」

きりんは、空を仰いで切なげな顔をした。

「いろいろ、嫌なものが増えたから」

私は、その言葉にひどく共感した。

この人と私は、きっととても心が通うのだと思った。

しかし、その言葉以来、きりんは姿を消した。

私は、公園でひたすらきりんを待った。

毎日、日が暮れるまでベンチに座って、じっと前を見つめていた。

きりんは必ず来るはずだった。私にとって、きりんは来なければならぬ存在だった。

冬の風が吹いて、年が明けて、春がきても、きりんは現れなかった。

それは春の日だった。

うなだれた足で訪れた公園の入り口で、車椅子の青年を見た。

思わず立ち止まって凝視すると、それは、青白い顔をしたきりんだった。

私は、言葉を発せずに、一心不乱に駆け寄った。

きりんはそんな私を見て、少し目を見開いた。

「ひさしぶり、中学生」

私は、一度だけ頷いた。

きりんは大分痩せてしまった。ただでさえ細かった指が骨ばっていた。

何も訊けずにいる私に、きりんは困ったように笑った。

「ずっとここにいたの？」

今度は私が答える番だった。

「ずっと、いたよ」

きりんは微笑んで、ありがとうと言った。

私達は、また以前のように喋った。

訊きたいことはたくさんあった。けれど、私はそれが訊けなかった。くだらない質問をひとつひとつ交わして、そのたび、きりんは優しく笑った。

「きりんは、そこに入院してるの？」

私は、隣の病院を指差して訊いた。

「うん」

きりんは頷いた。そんなことより、訊きたいことが喉まで詰まっていた。

いままでどうして来れなかったの。病気なの？

一回り細くなっただきりに、私が手を伸ばした、それと同時だった。ぱたぱた、と小気味の良い音を立てて、病院側の道路から誰かが走ってきたのは。

小柄な人だった。きりんとお揃いの栗色の髪を腰まで伸ばした、色白の女の人。

「みずき、」

彼女は、きりんをそう呼んだ。

私がかきりんを見つめると、きりんは困ったように微笑んだ。

「ごめん、もう帰らなきゃ」

きりんが私より先に帰路に着くのは始めてだった。
私のどこかで、きりんは永遠の存在だった。

色白の彼女は、きりんの車椅子をそつと押し始めた。
きりんは私に振り向くと、じゃあまたね、と言った。

「気をつけて帰れよ」

骨ばった手が、私に向けてゆらゆらと揺れた。

私には、彼女ときりんはとても親しい関係に見えた。

彼女はきりんの車椅子を押しながら、病院の方向へ進んでいった。

ふたりはきつと恋人同士なのだろうと、私は断定した。

きりと、恋人になった女の人。きりんが愛する女の人。

私の中のきりんには、恋人がいなかった。ずっと私だけを構ってくれる、そんな存在。

知らなかったのは私だと解つていながら、私はどこかで裏切られた
気持ちになっていた。

あのとときと同じ、密度の濃い喪失感。

栗色の髪と、色白の肌の彼女にひどく嫉妬心を抱きながら。

私は、逃げ出すように家へ帰った。

そして、それ以来、私は公園に行くのをきっぱりやめた。

過去を思い出すうえで、うやむやな記憶が多い中、きりんと
の出来

事がとても鮮明だった。

男の人の手を見ると、必ずきりんの骨ばった指を思い出す。中学3年生になった私は、不登校ながら、以前よりは確実に学校へ通っていた。

あの公園へ行かなくなっただけから、私の生活は白黒で構成されていた。きりんの服のいる。カーディガンと、シャツのいる。

私は、きりんのことをなにも知らなかった。

彼女が言った「みずき」という名前はきっと本名だったのだと思う。それ以外に知っていることなんて、私には何一つ無かった。

ただ、深くかわかっていられた気がしていて、不満ではなかった。そして、きりんも私のことをなにも知らなかった。

私達はどこかで通じ合っていたのだと、ふと思った。

懐かしくなったのだと言い訳をしながら、私の足は公園へ向かっていった。

学校を早退するほど無性に、きりんに会いたくなかった。

一目見ればそれでよかった。

きりんに会いたかった。

私の足は迷いもなく、公園に到着していた。

懐かしい匂い。ベンチ。植え替えられたのであろう桜の木から、桃色がひらひらと落ちる。

きりん。小さく呟いて、一番手前の定位置へ足を運ぶ。

案の定、きりんはいなかった。私は、ベンチに目を落とした。

「ねえ、」

後ろから声がかかった。固まりながら振り向く。きりん。頭の中で言葉がこだました。立っていたのは、見覚えのある女性だった。

栗色の髪は、肩の上ではっさり切ってあった。私は彼女を鮮明に覚えていた。

色白の肌が桃色に映える。彼女はふと、切ない表情を浮かべた。

「あなた、みずきの友達でしょ」

友達。そんなんじゃない。私達はもっと深い関係で結ばれていた。そう思いながら、私は黙って頷いた。

「みずきなら、こつちにいるよ。おいで」

彼女は病院側の道路へ歩き出した。

きりに会える。私は、彼女の後をもどかしい気持ちで着いていく。きりに会える。やっと、また喋れる。

彼女は病院の中へ入った。きりんは、やっぱり病気だったのだろうか。

「こつち」

彼女が止まったのは、病院の個室の前だった。

ネームプレートには「深川 瑞樹」と印刷してあった。

これが、きりんの本名だったのだと思った。

彼女は黙ってドアを引いた。私はすつと病室に入った。

きりと喋れる。きりにやっと会える。胸を高鳴らせて。

耳に入ったのは、規則的な機械音だった。
一定の秒ごとに、ピツ、ピツと音を立てる。
いつか、テレビでこんな光景を見た気がする。
人工呼吸器に繋がれた寝顔は、紛れも無くきりんだった。

私は言葉を失くした。ただ、その場に立ち尽くしていた。
栗色の髪が日に当たってきらきらひかる。
きりんは起きる気配がなく、青白い顔でベットに寝ていた。
点滴が繋がれた腕は細く、きりんそのものだった。

「2ヶ月前からこの状態なの」

彼女は静かに言った。

「瑞樹は、あなたと会いたがってた」

私は、それでも言葉が出なかった。
遅すぎた。なにもかも遅すぎたのだ。

きりに会いたくて、会いたくて、だけどそれだけだった。
私はどこかで、意地を張っていた。

窓の外に公園の桜が映る。きりんのいた公園。
きりんのいた公園は、きりんのいない公園になった。

私は、点滴のされていない方ののひらをそっと撫でた。
確かにぬくもりがある、骨ばった指。

この手に触れたくて、触れたくて、いつも見つめていた。
私が彼に触れたのは、これが初めてだった。
そしてきつと、これが最後なのだと思った。

「ひさしぶり、中学生」

そういつて笑うきりんの顔。

桜の桃色が、窓の外で風に揺れる。

彼は、私の初恋だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1327/>

麒麟

2010年10月22日00時24分発行